





春部目録

春は天氣の白候養生の法等十九ノ有

春風

△東風

△春雲

△遅日

△糸漉

△春月

△春夜

△春朝

△春夕

△春與

△春望

△春山

△春野

△春郊

△春海

△春川

△春雨

△霞

△あひこ

△長閑

△水ぬむ

△春の雑

此部は春三月ふまゝの色々  
乃雑事

△佐保姫

△木地爐縁

△東宮

△霞洞

△雙調

△春

△春

△草木

春の部は春三月ふまゝの色々  
正月は用ひて

△印の春三月

△春の部

△春



△柳	△薺菜	△山葵	△三葉芹	△海苔類	△石蓴	△養生類	△鶯	△百才鳥	△鶺鴒	△雲雀
春	春	春	春	春	春	春の部	春	春	春	春
△片	△椀	△獨活	△麩菜	△鹿角草	△種植	△鳥の轉	△目刺	△駒鳥	△鱉	△鱉
春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春

春 一目録終

# 春之部

△此印あるは春三月より季入

## 春時令

此部より春三月ふとたる季の物をのす

## 春風

○東風。春吹風のいづる

春風の地下より吹上り地中の生理を起し曠野青く是春の應なり○  
 巳卯の風少く其年大風あり  
 五月西春の南小秋の北の風も  
 東風を雨ふるととまるとようあり  
 哥の俗説といふととよりどよりあり  
 あり春の木より南の火かり南  
 風の時節の氣より相生と心  
 方の風雨とみれば方より時  
 節の氣と生れれば晴れ水春  
 水より水生木と生るとより  
 北風より暗き尤西北の風と  
 乾風といふ四季より暗き東  
 北の風は常より雨にかりといふ

ども春の北風を晴るを以て  
東北としども雨より申酉の  
風とせむるの常は晴とほと  
どふといふを春の南風とて雨  
とあるゆへ未申にまは羊頭と  
いつて雨よかるあり

哥拾遺

躬恒

吹凡とふふいひらん梅乃花  
らうらうの付そ香いままうけり

同 春風不谷処 後京極

おーあてはの春もあぢき  
君が代は代よへまうせとく

詞 胡糸。まおち。まおち。

非 春風や三原の松を清く 鬼貫

詩 春風 五字對句

煙花宜落日	春風開紫閣
絲管醉春風	大樂下朱樓

詩 春風七字對句

詩礎

只言啼鳥堪求侶 揺春風

無那春風欲送行 野外昏

春風夜動蘿衣薄 度春風

芳樹朝催玉管新 逐春風

霽日滿江寒漏靜 動陽春

春風遠閣白蘋生 待落梅

寒雨送行千里外 任好風

東風沉醉百花前 舞東風

春風詞

高遠

明月斷魂清靄々 平蕪歸路

緑迢々 此二句春月 人生莫遣

頭如雪 縱得春風亦不消 年ヲ

頭雪ノ如クナルヤウニナキ用心アリ  
頭ノ雪ハ春風ニモキヘサルゾ

春雲 風同西風吹

又降晴とあり事風の方角と  
同ト西南より東へ行と出雲と

より晴より東北より西へ行と  
入雲とあり雨なり或ひは東南

東北より雲と入るも雨西北  
西南より雲と出ると晴西南

と云ふも南より未申のあつて  
より雲出ると沖氣といふ雨あり

と云ふも北より南より雨あり  
と云ふも北より南より雨あり

と云ふも北より南より雨あり  
と云ふも北より南より雨あり

春天 △春の空ハゴまのどろ

碧落三天外 山川乱雲日

黄圖四海中 樓閣入烟霄

詩 春天七字對句 同上

雲斷岳蓮臨大路 樂春天

天晴官柳暗長春 兼煙霞

山河香映春雲下 拂春雲

城闕參差晚樹中 入洞天

詩 春天七字對句 同上

詩 春天七字對句 同上

詩 春天七字對句 同上

春日

北山殿

為世

日影の今物もかゝぬぞりけり

兼久百首

忠房

かゝ夜もくらさぬとてけり

詞 かつら。あつ。天にふん。教。日影。野。と。わ。の。け。こ。す。う。の。る。さ。の。お。お。の。お。の。お。の。お。の。お。

連 千里も女約の春日や

非 ひろ馬て出ぬも梅も

狂 せげやるふ雀の砂あびて

候 せげやるふ雀の砂あびて

遅日

△ 春の日おぼろ。右。春の日おぼろ。右。春の日おぼろ。

も春の日おぼろ。右。春の日おぼろ。

新古今

我かまの山おふあく

長く

六百番哥合

有家

夕暮のあひいけさの朝が

万葉集

うつくふてれも春日の雲雀あり

詞 夕暮。春のあひいけさの朝が

非 傘張のほむらひて

狂 杖柳の糸あらへて

とこ小織あひ月あかき

詩 遅日五字對句

同上

彩雲歌處斷

遅日暎方照

遅日舞前留高齋淡復空

詩 遅日七字對句

詩礎

桃源洞裏居人滿 淑景移

春時令 糸遊 春月 春ノ四

桂林山中佳日長 近春遲

春風自信牙槽動 對斜暉

遲日徐看錦纜牽 日光遲

糸遊 遊糸 春の日のくみ時空と見

陽谷 野馬 日のくみ埃の乱とて馬の走

哥 六百番 定家

春月 春の月 春の月ハ

新古今 大江千里

同 源具親

夫木 春山月 入道攝政

同 後九條内大臣

同 定家

同 家隆

同 有兼

同 為氏

同 宣房

同

同

同

同

同

同

ひかりにあうぬ去れらの月  
詞 霞のふり。霧のそこ。夜半  
の月。影の長。露の香。のどろ。  
あかりに照る。曇りやぬ。あふ  
はるのあけの月。言けの月。  
かすみのかげの月。夜半の月。  
連 雲の白。月。月。月。月。月。月。月。月。  
非 糸の白。月。月。月。月。月。月。月。月。

詩 春月七字對句 詩 贊

何尹天明坐莫辭 懷清霄

春城月出人皆醉 月朦朧

明月斷魂清露 照野梅

平蕪歸路綠迢々 影含烟

詩 春月五字對句 同上

苔澗春泉滿 琴伴前庭月

蘿軒夜月閑 酒勸後苑春

詩 春月詞 劉方平

更深月色半人家 北斗闌干

南斗斜 夜偏知春氣暖 虫声新透綠

窓紗 秋ノ月トキカヒ夜深トモ

詩 同 諸光儀

映門淮水綠 留騎主人心

朝夜々々深 明月隨良椽春

夜ニフカクミ ツルトナリ

春夜 續後撰 義政大臣



風小月れつ... 詞 春の曙... 狂 人月... 春の曙... 藤原家隆

春朝

新古今 藤原家隆

詞 春の曙... 狂 人月... 春の曙... 藤原家隆

華堂翠幕春風至 曙光寒

繡閣金屏曙色開 送曉鶯

春浮玉藻寒初落 月沫収

露拂金莖曙欲分 入晨遊

春曉詞 孟浩然

春眠不覺曉處々聞啼鳥 春ハ

夜 多キユ一夜ノ明ルヲ知ラス鳥ノヤ

夜 帝クニフトオトロキ目サムルゾ

来風雨聲花落知多少 夕 雨風

春夕 春の夕ぐれといふや

玉葉 百ふる声のどやと遠を乃

詞 夕ぐれ... 夕霞... 夕日... 夕霞...

連 梅の香... 不知

狂 小寺のま... 五綾

詩 春夕七字對句 詩礎

緑水殘霞催席散 隔暮雲

畫樓初月待人歸 夕陽遲

小苑迴廊春寂々 散餘暉

浴鳥歸鷺晚微々 目覺閑

春興 春野山を遊びて興あり

新古今 家隆

詞梅堂柳下流 弟妻さびび。登

春望 春の暮まき海川野山も

夫木 羅中眺望 有家

ひさしづのぶの草本あめもふ

春の山川。初のうれふ。泳ぎる。見こころ。物の春。まめもを死

詩春望五字對句 同上

白雲回望合 城闕千門晚

青靄入香無 山河四望春

詩春望七字對句 詩礎

白蘋楚水三湘晚 樹中分

芳草秦城二月初 春色明

近郭乱山横 古渡景物滋

野莊喬木帶新煙 接人烟

詩曲江春望 唐 盧綸

菖蒲翻葉柳交枝 暗上蓮舟

鳥不知 影曲江八禁中ニアル江辺尤

ゲリ菖蒲モ葉サカヘテ夏チカク春  
モ未ニナリ采蓮ノ舟ヲ催スコロ  
ニモナナリ更ニ到リ無ク花ハ最モ深ク處ニ玉ノ樓ニ  
金ノ殿ノ影ヲ參シ差ス花チリハテ、冬ニ見ル  
シノ樓ノ殿ノカタタガヒ  
ナルカゲンミツ

詩 西亭春望 西亭ハ西宮向也 王昌齡  
宮女ノ居ル宮殿也

日長風暖柳青青 北雁歸飛入

管冥 春モ半スグルコロ雁ノヲガ  
古サトニカヘラント雲井ニトフ

岳陽樓上聞吹笛 能使春心滿洞

庭 笛ノ音ヲキクニツケテ  
故卿ヲ慕フ心イト切也

春山 春ハ艸木もさるえて山の  
若しきかりるる事さう

拾遺 忠岑

夫木 春山霞 家隆

依保娘の名にありて山をいふ  
けさもかたみれ家よりなり

山家 深山不知春 藤原公重

雪分て外山の谷はうらむいとの  
ふりくの里も春やつぐらん

詞 春の山色 山の煙うらむ。遠山  
くもむ。霧はあけ雲をまわりぬ谷

けうらむ。春の山後。やうはせ。  
よりの山。とるう山。山もいぬ

俳 地づきの山を霞のよるれま 立  
多ふもうとれ山はまれば紫相

在四方山の底の夜うらむいと  
まのうらむいとつる常盤

春山五字對句 同上

緑野明朝日 花雜重々樹

青山澹晚煙 雪輕處々山

詩 春山七字對句 詩礎

井轉轆轤千樹曉 滿春山

鎖開閭闔方山春 隔暮雲

春 詩 春山 春九

遠山積翠橫海島カクシヤノミドリ五嶺春カクシヤノミドリ

殘霞飛丹映江濱ハナミツヤマニ花滿山カクシヤノミドリ

詩 春山詞

劉商

君去春山誰共遊カクシヤノミドリ鳥啼花落水カクシヤノミドリ

空流カクシヤノミドリ君カヘラハ花鳥ノ風景モモノ

如今送別臨溪水カクシヤノミドリ他日相カクシヤノミドリ

思來水頭カクシヤノミドリ今溪水ノアタリニテ別

思ニ相思ヘトナリ

春野

哥 万葉春のふ

我之春野カクシヤノミドリあつと一夜絲ふり

らう。道乃也。みづうそふ。

かき分群。見もくは。あきくえ。

沙更とり。かきみ。雲間。こ

らみ、あきくえ。ふれり。つごふ。

とみ色。いしひ。群遊。美物。

春野。梅。柳。馬。はくし。

詩 春野五字對句

同上

臺榭春光媚ヤチクチテイノキ野竹池亭氣チキキケンキ

郊原遠樹平カクシヤノミドリ春花澗谷香カクシヤノミドリ

詩 春野七字對句

詩礎

聽雞曉闕踈星白オウハウトウニ落芳塘カクシヤノミドリ

走馬春光細柳黃イルハイブニ入平蕪カクシヤノミドリ

田夫就餉還依草ヤダインチ野外烟カクシヤノミドリ

野雉驚飛不遇林カクシヤノミドリ春色深カクシヤノミドリ

春郊 春の野乃事なり 隆信

春の野乃事なり 隆信

續古今 柳本人磨

春の野乃事なり 隆信

春の野乃事なり 隆信

春の野乃事なり 隆信

春郊詞板粹

水遠江渠漸有聲氣融烟

鳩晚來明水声キコヘ野辺モ春ノ

氣令ニキワタル

春海 春のけしきものぞろろ

四季百首 定家

白雲の白ひし秋もまれば

詞 春けうも。霞は引じか

ゆる。霞のひき。霞ふとちと

浪の花。さる多めりあを。霞と

とろろ。なと吹上のたぬ。縁する。

春の浦く。田の海のとろ。

非ちる紙のゆれとうゆるは海花縣

詩 春海五字對句 同上

月明三峽曉氣清連曙海

海深九江春雲白洗春湖

詩 春海七字對句 詩礎

山入白樓沙苑暮渡江春

潮生滄海野塘春遠春流

雲夢夕陽愁裏色染湖波

洞庭春浪坐來聲洞庭春

春川 川は梅櫻の水ふり  
ろくすくあけい花の

らうらうゆる体雪消て水ま  
さうー体ふとけをうらうより

母夫木 公朝

六田川客の柳のまれ棹  
わくあけい水消て水ま

詞 春のさう。わのく度ひ。まの  
あけい。梅ふえゆる。とく水。お  
わらう。せうとく。山の家やま

非川そしや響も緑のつまへは仙鶴

詩 春川 七字對句 詩 礎

樹色 到京 三百里 渡水人

河流 歸漢 幾千年 逐水平

湘潭 雲盡 暮山出 盡清流

蜀雪 消春 水來 弄晴川

春雨

春雨ハ音かく志わや  
うふる物さひーきこ

哥 建長百首 良教

よまぬのうまびく高のま柳み  
うひてうらうらう癒れまうま

新後撰 庭春雨 大政大臣

世は捨る身のかくれぬのふるふ  
さううへーのふをのまさと免

夫木 旅春雨 知家

旅衣ぬきてそ神よまうまうら  
る後よけいあゆるさるん乃そ

詞 柳か。くも。志免れ。わや。志  
川く。それぬ。そ海ふる。かさく

らに。かこられて。かたこれ  
そくを。り信。衣ふるさ免。このち春

ぬ。まのさる。あけい。うらう春  
めむま本。履うら。くくくも

けぬ。喜ささ。ぬるくも。うらぬ。花  
と免くひ下なる。さ免。○雲。まあ

あかてるの雲。ぬま。くそ。うら。風  
あ風。風ま。系。あけい。朝。東



同 野径霞 全

春白ゆかさまの衣山風よ  
まのぶらちどうもこれぞ行

建保百首 海霞 全

かひく波もてゆふ山やそれ  
らみふれけすまの浦を

建曆哥合 山家霞 為家

谷のたれくはの色あまきふ  
かしてわけやりの夕う勢

夫木 海辺霞 参議為相

くさ月の夕なまきと波路を  
かみそとて帰るふふ

續古 朝霞 家隆

春の花のおちろ月夜たごころ  
ゆる朝日もなほうけひん

夫木 河辺霞 成茂

水とやまの柳乃やうみどり  
うけんのまは乃まろく

建保哥合 野霞 順徳院

ひさゆやわらうまうはる秋の  
まろばそかまむものひくさえ

遠まろ。海火のまむ。霞じや。堀

ぬの煙ももろぬ。浦く霞じ。関内

けんろろ。霞小とま。霞とあゆ

旅人 森本の枝もろぬ。風ま

里里の煙ももろぬ。里遠くまむ

我まじ里た霞 河沿の春まむ

霞小む。海浜。河柳まむ。岩

うすむ。橋霞まむ。霞はゆた

ゆら。霞小む。霞て遠ま川枝

日長用ひらすむ。霞まむ。ゆ

とまもろぬ。うかまむ。くり  
えてぬ。雨ぬるまもろぬ。霞も  
おんほ。春まむかまむ。花の枝と  
かむ。霞中むいむ。柳山本の  
柳まむ。河柳まむ。霞小む。風  
たてまむ。梅根の梅まむ。ま  
枝もろぬ。霞の中む白ふ。春  
松風まむ。松系まむ。檜原。枝家  
まむ。松系霞小む。それまむ  
ぬ。竹の枝まむ。まむ。風まむ



居所霞の窓。くじの形。花のふく  
かむじ。霞む垣根。衣霞の衣。佐保  
娘の衣。うさみの袖。旅群ののりす  
まのまより。古里花をむむ。初方  
うぬ都れむとからと。無常。群辺花霞  
ふた霞。むらさきの戀。くれぬ恋。か  
るらる。ゆるゆる。春の枝。むむ。あ  
わらうとたのむをむむ。

狂 九をと春の霞はあとの目ふ風  
たふらむけのふらあり 女風

霞をて雲のうらむとくきん  
たふとぬすて霞あらん 法心上人

○詩み作ふ霞と本朝の哥ふ  
詠むる霞といちうう歌連俳母  
詠して春の季ふ入ふの蒙とふ  
そのみて霞と詠と春の比天  
氣の半ふをいふ又詩ふはる  
霞の朝霞晚霞のふい本朝み  
ていあさやけ夕やけの事み  
今いふかどこの事みていふ

雨段 是ハ詩まつらるの事みあり  
本朝俗まの朝やけ夕や

けの事入日のとるは東の方  
赤けてきへるは早く早きゆ  
雨ふるをそく一面はあつた  
二三日の内は雨ふるあり日  
の入つて西赤く南へする  
の晴あり。かすこの事季  
くハ本篇博物笈といふ書  
物まのぶるゆへあふ畧は

詩 霞五字對句 同上

霜空澄曉氣 聖藻無寒露

霞景堂芳春 仙杯落晚霞

詩 霞七字對句 詩礎

雲開日月臨 青瑣卷曙霞

風卷烟霞上 紫微晚霞多

カセイテエンカノボルレニ  
カセイテエンカノボルレニ  
カセイテエンカノボルレニ  
カセイテエンカノボルレニ

遠山積翠横海島 趨紫霞

殘霞飛丹映江湄 向晚霞

長閑 のくろく △暖△温△麗△春の日はさむ

天氣ほごうく和暖ふありくる  
をの麗も同じ心めく百花  
咲乱まてうかりきと云心とゆめり

玉葉 永福門院内侍

をらこの花乃のわがやをえて  
ゆるる庭のまそののけこ

詞 夕日 香柳 法人 眠胡蝶  
庭 山の塔 定めのけき 松 なるあ  
草 香けき 玉小扇 春の日は花さる  
谷のふ出る 雲 捲糸

非 附 津風 船のどけき 和国の系  
今 田のかき なるあ 一有

水ぬい △つてさける△水あつた  
春の氣をゆるむ

水陰氣のりか冬はあてま  
りて氷とある春の陽氣と得  
てゆるむのさる 阿誰

非 水ぬい ゆるむのさる 阿誰

詩 水暖七字對句 同上

春風増風色 川原通霽色  
麗日發光華 田野徧春容

詩 水暖七字對句 詩礎

旌旗日暖龍蛇動 居住閑

宮殿風微燕雀高 雲過遲

芳郊綠園春晴散 趣轉閑

復道離宮烟霧生 玉生烟

春雜 此部は春三月より  
ころ混雜の物とする

佐保姫 さほひめ 春の造化の神也

天地の色とありさりとありみ  
あづきさるる方り袖下集に四季

の姫は歌あり佐保姫の音神の  
にたれて代と身をまわりの風

① 草庵 佐保姫のまらもきさるる名も  
あやうき鹿小さるる春の山う坊頼阿

詞春の雨々々の風夕夕き佐保姫  
の産後夜さふひ女の神也宗宗るを。

花咲山三のさうらうらうさえう人子  
非佐保姫の家作りは産後宗後

狂さ保姫の産後夜めひう一帯  
けさ保まとうの家おれひ 走帆

木地爐縁 きぢいろゑ 数寄屋かこ  
いの炉に茶人

冬の炉小塗さちと用ひ春の木地を  
用や春の自然とやうさつと

塗さのこそいやこり久 とる 東官  
えぐさうと孤うりてあり

春 どうぞうとても春の東と主  
官 どのゆへ季々ういもご御即位

かき親王の御 かき 霞の洞 つとむ 天子の  
事と申と也 御位と

とづせぬとて仙洞と申奉るとの  
御事あり季小用る霞の洞ハ仙

人の居所なる目 さう 雙調 さう 春の調子  
出度なく奉る之 春の調子

物に生ると其音ハ木音あり内裏ハ  
て舞樂ある時春ハさの調子さるる

春小あひや あ 雪玉集 あ いそのかみ

あつたさうとて付もさう  
あつた荒田のさふあひや 春

あひ あ 伊勢物語 月やあひ  
あひやひうけさ

あひ我かひひ あ 春あひぬ  
あひのさうさ

② 俊成卿百首さふあひぬ紙詠の  
あひ我かひひは清い地あり

### 春養生

素問曰く春三月これ發

陳とつ天地共小生一萬物以て榮ふ夜なり臥し早く起さ庭にひろく歩し形とゆるやかにして志を生ぜし先よし生じて殺すことなれ賞して罰とつことなき是養生の道也

### 春天氣

春の初甲子晴き天気がばては雨ふれい

春中雨多し此日むりの事候もあらず春の物のころ究るれ年中の風雨もなれ准る事多し殊小甲子の干支の始るは此日の晴雨も多くつるもの春の南風の雨之きて春の雨の歌ふも詠如くふめく降續くもの踏んその四方は山の根雲のたれ登る此時風の東小替るべし又北の吹上て日和ふるれは暗ると云共寒くして四五日の内ましく雨あり

### 春草木

此づい春の草木をいれ如此あり一は正月の季は用ゆること也

### 柳

△楊柳 △川柳 △青柳 △青柳 △青柳

### 名異柳

金絲。白綿。点花。弱柳。樹聖△門の柳

△王柳 △風見草 △風無柳

△根水草 △柳の鬢

△春すき

### 万葉

人九

軽かむつこのそとの川登るさ

### 堀川百首

俊頼

もかりぬつ志めまはるるせよ  
ほそい中あき風ふたみとほ

文治百首

定家

遠くをたみどりけふふあきまは  
まらふかこの庭乃あや中だ

夫木 岸柳 伊勢大輔

も柳のいそげほふくあひの  
さしゆくそとまをけし

夫木 杜柳 匡房卿

くさへてふさふさあまきこ  
ゆくよりかふるま柳のり

建長十首 河柳 光俊

せげくやそあかさままれの玉川の  
ほぢい柳 えぞそふうぢく

建長百首 水柳柳 仲正

里を死後の河をたれうあやふき  
やつへまぢりかつせよこら

夫木 水辺柳 家隆

ま田川せまふいあれどかああ  
色そ免さくひま乃青柳

同 閑居柳 兼宗卿

我意のりりく柳うらなびく  
とあご乃系いんけ人りき

詞 ぶびく。おそえてよるう。野  
野野系柳。美路路まようて

初人もまゝある。ま柳のほむた。  
河原の柳。川そい柳。ほむた。

ぬきそやま。給のまたまん。底  
教そまま深まま。底の柳。お

とひて教ふる。波ふるまを堤。堤乃  
柳。さ柳。う柳。籬まがたふさび

を。籬のそい。垣の柳。垣根乃  
柳。庭庭柳。門の柳。たが柳。田

門。田ふまびく。系柳の系。青柳の系。  
梅娘の子深は系。花田の系。風ま

る。風。うらま。うらま。風。風。風。  
か。柳の枝ふる。春風。柳はふる

ま。風。色ふま。風。風。風。風。  
は。ま。ま。柳の髪。風。風。風。み

ら。ま。髪。お。髪。眉。み。み。み。み。  
眉。見。柳の系。眉。こ。み。み。み。み。

引。眉の系。露。系。に。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。  
と。む。た。ら。う。は。ま。つ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

と。む。た。ら。う。は。ま。つ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

霧に全風はみぎく 霧能ふるびく  
 又霧の来きやう 烟けつ柳。くさる木の  
 芽物のそとに 煙は似たり 鶯本化  
 柳よりいふ 梅柳が枝も白く  
 風標たつと 柳の系にぬきとめて  
 遠村 誰宿の柳の柳 誰宿の堤  
 風ふて 雨にみぎく 故郷あるこの  
 みるの柳 位合もさし 彩塔山 霞只言  
 柳のうらさし 入りの柳 雲のま柳 彩の  
 青柳 池の柳 青柳 柳みぎり。あ  
 ひく柳 川柳 ちくちく柳 柳乃眉  
 柳の糸めづり 柳 彩柳 柳の柳  
 柱 春は日のまわし 柳かき  
 柳のうらさし 風乃子 行風  
 猿沢の柳より 彩ありくと  
 月ありて 彩うつり けり 常盤巻  
 蓮 行と来る 柳やなごり 毒水紹巴  
 柳より 冬や 彩い 春の風宗祇

能く 柳の角

碩珠の賢き 柳の角

芽柳 又 柳の角

川 又 柳の角

朔日 二 柳の角

い 柳の角

蓋 柳の角

柳之 十圍 柳の角

故事 十圍 柳の角

丸 柳の角

ト 柳の角

云 柳の角

然 柳の角

夜 柳の角

百 柳の角

テ 柳の角

ト 柳の角

芥  
 異名 根白 柳の角  
 水英 苦蕒 女菜 新撰 柳の角

まゝのふりててゆくふりハ  
家々のつまんやせ川のせり

詞 春日野。雪消の沢。法法小池  
内。塩菜昔のく月。並ねるも。梅并

小并。凍根并。差せり。沢の并。沢の  
雪消の并。嫁の男。少津やと。あ菜

能。せうつむと。せ酒さや。か且蒙  
梅。よりふらふら。ま。る根并。か龜。言

浮。小。梅。并。梳。る。る。れ。れ。其。角  
引。す。り。や。線。小。梅。并。の。花。同

女。菜。并。の。事。さ。り。一。説。よ。ハ  
せ。り。の。外。小。別。ふ。る。と

又。さ。り。の。あ。り。と。い。説。あ。れ。と。も  
七。日。の。若。菜。七。種。十。二。種。と。も。せ

ア。い。か。れ。も。あ。く。の。名。目。を。一  
是。と。以。て。さ。時。り。せ。れ。異。名。あ。り。け。り

◎。夫。未。嫁。の。女。り。あ。く。れ。り。あ。り。と。い。ふ  
と。も。多。將。國。の。原。畔。つ。と。い。は。る。并

馬。川。の。女。り。山。國。の。あ。く。れ。り。あ。り。と。い。ふ  
若。神。を。あ。く。れ。り。は。る。と。い。ふ

薺。菜。冬。至。後。齒。で。生。と。三。三。月  
並。と。あ。り。ん。薺。菜。也。と。云

薺。蒿。順。和。名。曰。あ。つ。ま。の。和。名  
か。ま。ご。こ。り。◎。夫。木

く。ふ。は。ま。て。あ。り。の。あ。く。れ。り。あ。り。と。い。ふ  
あ。く。の。あ。り。の。あ。く。れ。り。あ。り。と。い。ふ

嫁。萩。薺。蒿。の。こ。ろ。◎。非。萩  
の。内。部。を。あ。く。れ。り。あ。り。と。い。ふ

◎。正。負。石。を。あ。く。れ。り。あ。り。と。い。ふ  
と。い。ふ。色。々。説。あ。り。ん。三。品。と。い。ふ。同。物。也

嫁。菜。雞。見。勝。と。云。◎。非。好。も。と。い。ふ  
と。い。ふ。あ。り。と。い。ふ。あ。り。と。い。ふ。あ。り。と。い。ふ

椿。△。玉。椿。八。十。代。の。白。玉。椿。の。書  
海。石。榴。△。列。々。椿。△。伊。勢。椿。の

二。階。椿。等。別。種。さ。り。數。百。種。あ。り  
○。山。茶。海。石。榴。櫻。椿。と。い。ふ

皆。と。い。ふ。と。訓。と。尚。説。多。し  
後。編。の。あ。り。と。い。ふ

波。菘。菜。異。名。波。斯。州。赤。根。州  
波。菘。菜。正。月。攝。物。春。喰

穀精草 やや艸 裁星艸三月の内田の中を生じ葉石

昔の草花小き丸じて白く光りて星のおく 木は秋とん

秦椒の皮 山椒皮ともかく 山椒の木の中へ

雑菜摘 雑菜とむらうの季は 摘む春に 諸の菜のこ

山葵 山中の水ちりて取生じ人 家をもほへ三月末三月節まで

獨活 風をよこす獨活ゆふ名づく 葉獨活をさぐりていふこ

○二説は二月の季とともあり 風はぬかきとさうとひ絲桐

三葉芹 三葉ともいふ正月末より二月苗生じ七葉

喰ふ二説は正月ふとる説もあり 又二月ふとる説もあり可考

廣美の花乃句 花光る 言葉え

苔脯 海苔ともかく。海のこけえ いろく種類あり及ふ記と

青苔 乾苔もく味辛くも一伊勢 いろより多く出るゆゑ

神化苔 石の上生じるものなり 石の上生じるものなり

於期苔 海中石の上生じ其うち いろなるものなり

浅草苔 浅草の苔なり 紀州瀬多 出る

櫻苔 色は黄白櫻の意 ちくちくもみたる いろなり三月の季も多

能く水や何れも苔の味其角 雲州より 多く出る

青苔や湖に生じ松又艸 いろなり

任武苔なる浅草苔の意 いろなり 信海

神ぬき海士のうりや青苔や いろなり

鹿角草 鹿尾草。六味菜といふ いろなり

如く色なり伊勢物語 業平朝臣 いろなり

るいあはむらねるは





(異名) 赤庚 鶯黃 楚雀 博黍

黃鳥 容鳥 谷鳥 黃公 百喜

黃鸝 黃飛 會庚 花見鳥 印鳥

とりの鳥 鶯の鳥 歌の鳥 鶯の鳥

(連) 鶯は明くはくはくはくはくはく 紹巴

(俳) 鶯はあつとつとつとつとつとつ 其角

鶯のるのい何ゆくはくはくはく 思貫

鶯の初まははくはくはくはくはく 移竹

鶯のいといまはくはくはくはくはく 来山

(宮) 藏玉 花見鳥の證哥

十云いんやひふふりゆく山里の

初まはくはくはくはくはくはく

藏玉 及びいまの證哥

山里のあまきえすていんかひさり

初まはくはくはくはくはくはく

文治百首 定家

鶯の宿いぬ初まはくはくはくはく

まごさうされぬいんかひさり

家集 初聞鶯 定家

あま玉の年は初まはくはくはくはく

初まはくはくはくはくはくはく

弘長百首 竹鶯 為氏

りくあはのみうたのあま玉は鶯の

あま玉はうちあま玉はくはくはくはく

吉原保哥合 旅宿曉鶯

初まはくはくはくはくはくはく

鶯のあま玉はくはくはくはくはく

建仁哥合 関路鶯 家隆

鶯のあま玉はくはくはくはくはく

あま玉のあま玉はくはくはくはく

夫木 雪中鶯 小宰相

初まはくはくはくはくはくはく

あま玉はくはくはくはくはくはく

同 故卿鶯 行能

鶯のあま玉はくはくはくはくはく

あま玉はくはくはくはくはくはく

夫木 寒野鶯 家隆

あま玉はくはくはくはくはくはく

夫木 松上鶯 小大進

あま玉はくはくはくはくはくはく

あま玉はくはくはくはくはくはく

あま玉はくはくはくはくはくはく

室治百首 朝鶯 為家

めねまど縁ぐるの竹たのやた  
かからよせやうぶひすたなく

金葉 山家鶯 摂政左大臣  
山更ゆうとさの中をささきひこ

谷乃鶯縁そのまをせわく  
夫木 田家鶯 俊成

まひとが秋のそ縁を松くねま  
ゆらまふきさうりの声々々

同 浦鶯 家隆

雪のまらふとさけが秋波うと  
うらひ乃さとも笑やけさか

詞 嘯聲 木つさふうのうさある  
茶もく百さけりそあく柳

雪雲の本はさふ雪の中は雪狐  
まがりてあく谷は谷は果谷の

戸ある軒 柳の雪 新煙あさあなる  
霞霞の中 雪霞ふじふ霞さるさ

朝の雪のまどおさうさなく  
ふれの雪縁ぐるの竹の縁ぐる

垣根さなるはさふ竹の縁ぐる竹  
の小ささふうの初音いともさ

春風はぐる 暮春 仍去去 小た菓  
いふふ友友とある友さ 梅 梅のふ

柳の雪 雲は雪 柳の月ふるく  
曉ふく雪花小くさ 菓なる

雪縁ぐるの雪 雪の縁は雪 雪の  
雪今来も 縁は雪 秋は雪 雪

狂 縁報で雪風さるさる 雪乃  
ゆるゆる縁はさふ公えん次良

梅が枝はさふの雪をらんくさ  
口をさるさるいふさるさる 宗俊

詩 鶯五字對句 同上

魚戯芙蓉水 騎擁軒裳客  
ハキス イクハシノヒト

鶯啼楊柳風 鶯驚翰墨林  
ワウハナクアウリウノカセ ワウハナトロシカシホシノハシ  
ヤチキ 詩文ノタツシ

詩 鶯七字對句 詩礎

林間花雜平陽舞 作春啼  
リンカンハナマシハルヘイヨウノマシ ナクシニシテイラ

谷裏鶯和弄玉蕭 始藏鶯  
コクリワウクハスロウキヨクシウウ ハシラカススス  
鶯ノ声ハ弄玉カ蕭ニ似タリ

春山鶯啼修竹裏

轉黃鸝

仙家犬吠白雲間

送好音

詩鶯詞

唐鄭暗

欲轉聲猶波將飛羽未調

飛トハスレハ羽イハダハハノハヌ

サヘツラントハスレド声ツロハズ

高風不

居スルヲ得ナント

詩鶯詞

鄭谷

春雲薄々日輝々宮樹煙深隔

水飛

為歌歌擊仙籍麻姑乞與女真

衣カ、ルベシタトハ麻姑カ故事ノ如シ

鶯鳥之故事

鶯梭

梭ハ女の機

のいよるにハハの村と投て機とや如

美兒笛

秦女笙

鶯の初音のそふやうにうはり

を秦王の女子弄玉といふ名人

の笙乃ありろ

仙韶九成

声仙家の音樂

金衣公子

鳥の囀

百千鳥

春ハすべての鳥

とつとく鶯の名とかける書  
もろまといくと覚るより一頭

昭の説るりかいらは鳥或は鳥  
の千声をくくしては春をうか

◎古今百子春をえづる春はおどた  
わくわくも我をありゆくもす

◎能河上柳梅の目刺 白魚の  
石らそり其角

竹の串とりて白魚の目をつらぬ  
き月とて賣る勢切り專出る

◎鶯鳥 形鳥より太黒色を撃つ調ふ  
ゆる雄の暗く呼雌の雨とよめ

◎駒鳥 頭と左右ふくくて珍走駒の  
如く故ふ名づく春夏能嘯

◎雲雀 日の暗くする時高く上り  
て鳴る日暗くと心と急ぐ

◎干鱈 たれりくく諸國よ  
て京師大坂等へ春い

多く上りきくる故春の季とする  
◎能 干てもまご鮫のきを春能東鯉

春の部終

入用字引集

批字引い世俗日く入用の文字  
と撰とあつめたり用ひざる遠  
き文字とまづか文字とひくふ  
甚とまやく之真の早刻あり

須為批  
市燈  
市雲本  
ハ為偽  
板也



文化元年甲子臘月發行

浪花 南久寶寺町心齋橋通  
北久良町四丁目 屋新兵衛  
同 河内屋新治郎  
同 唐物屋四丁目 屋茂兵衛  
同 島甲一丁目 屋市良治

